

発行：株式会社リンク・インタラック
 担当：事業統括ユニット プロダクト開発グループ
 住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
 TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：info@interac.co.jp



金ケ崎町の英語教育の成功要因とは： 「児童生徒英語教育学習状況調査」からの示唆

リンク・インタラックでは、英語の指導改善に資する情報提供の一環として、弊社のALTを配置する全国の小・中学校を対象に「児童生徒英語教育学習状況調査」を定期的実施しています。2022年度の調査で優れた結果を示した自治体の1つである岩手県金ケ崎町では、幼保・小・中連携やALTが多くの時間指導に参加するといった特色ある取り組みにより、英語の学習意欲と学力の両方を高めることに成功しています。今回は、金ケ崎町が好事例を生み出している秘訣について取材を通して探っていきます。

全国規模の英語教育学習状況調査

リンク・インタラックの「児童生徒英語学習状況調査」は児童生徒の英語学習における「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を毎年調査することで、英語教育事業の効果を検証し、各自治体の英語教育施策の充実に活用していただくためのものです。2022年度調査は10～12月に、弊社のALTを配置する小・中学校に通う小学校第6学年、中学校第3学年の児童生徒約10,000人を対象に実施しました。

本調査は、「① アンケート」と「② 英語テスト」の2分野で構成されています。「① アンケート」は、英語や英語学習に対する意識等を調べるもので、小学校は10問、中学校は13問を出題します。回答は、「とてもそう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「ほとんどそう思わない」の4択方式です。

「② 英語テスト」では、小学校はリスニングテストを16問、中学校はリスニングテスト15問とリーディングテスト20問を出題しました。

結果については、各小・中学校の個別データや全国平均に加え、当該自治体の前年度平均との比較などを詳細なレポー

トとして各自治体に提供し、カリキュラムや授業改善の方向性を定めるエビデンスとしてご活用いただいています。

児童生徒の「英語を学び続けたい」意欲が高い金ケ崎町

2022年度調査を実施した自治体の中で好結果を示したのが金ケ崎町です。英語学習に対する意識をたずねた「① アンケート」の質問すべてにおいて、肯定的な回答（「とてもそう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計）の割合が全国平均*と比べてかなり高いことが分かりました。

小学校では、「英語の勉強は楽しい」の質問に対して肯定的な回答の割合が95.0%で、全国平均（79.5%）に比べて15.5%上回りました。また、「これからも英語を学び続けたい」の質問に対する肯定的な回答は95.8%で、全国平均（82.1%）より13.7%高くなっています。

中学校では「英語の勉強は楽しい」の質問に対して肯定的な回答の割合は92.0%（全国平均65.2%より26.8%高い）、「これからも英語を学び続けたい」の質問に対する肯定的な回答は92.8%（全国平均71.6%より21.2%高い）となっています。

●「とてもそう思う」「どちらかと言えばそう思う」を含む肯定的な回答の割合 (%)

	質問内容	小学6年生		中学3年生	
		金ケ崎町	全国平均	金ケ崎町	全国平均
1	英語の勉強は楽しい	95.0	79.5	92.0	65.2
2	これからも英語を学び続けたい	95.8	82.1	92.8	71.6
3	外国の人たちや外国のことについてもっと知りたい	91.6	74.8	89.6	68.5
4	自分の考えや気持ちを英語で伝えてみたい	79.8	74.3	84.8	64.4
5	外国の人に英語で質問されたら、英語で答えてみたい			93.6	78.3
6	外国の人たちと英語で話してみたい	81.5	70.9	88.8	69.2
7	外国の人たちと英語でメールや手紙のやり取りをしてみたい	73.9	53.6	80.0	51.1
8	外国の人と友だちになりたい（友だちをつくりたい）	84.9	73.1	88.8	67.2
9	外国のテレビ番組や映画を英語のままで見たい	52.1	51.0	72.8	60.2
10	英語で書かれたインターネットのサイトや記事、ブログを読みたい	58.0	48.7	68.8	49.3
11	将来英語を使うような生活をしたり仕事をしたりしたい			52.0	37.3
12	学んだ英語を活かして、将来の生活や仕事の役に立てたい			87.2	62.5
13	（将来英語を使って仕事をしたり）外国の人たちと一緒に仕事をしたい	66.4	56.9	72.0	47.8

金ケ崎町における児童生徒の英語学習に対する意識（弊社「2022年度 児童生徒英語学習状況調査」より）

学力面でも全国平均を上回る

調査の「② 英語テスト」では、小学校のリスニングテスト16問の平均正答率は69.7%、同じく中学校のリスニングテスト15問では55.3%となりました。リーディングテスト20問では金ケ崎町の平均正答率は56.5%で、全国平均55.4%を上回る結果となりました。

なお、同町の中学3年生は、岩手県が人材育成の指標とする「中学3年生において求められている英語力(CEFR A1レベル相当以上)を有する生徒の割合」が、県目標値(50.0%)を上回る結果(55.5%)となっていることから、子どもたちの英語運用能力は高いレベルを維持していることが裏付けられています。

* 全国平均は「2021年度 児童生徒英語学習状況調査」の大規模調査データを使用しています。

幼保・小・中連携の英語教育実践は10年以上前から

金ケ崎町の子どもたちが、小学校、中学校いずれにおいても英語学習に前向きで、よい成績をあげているのはなぜなのでしょう。金ケ崎町教育委員会を訪問すると、連携体制の強い英語教育が行われていることがわかりました。

同町は岩手県の南西内陸部の胆沢郡北部に位置する人口約1万5000人の町です。農業が盛んなだけでなく岩手県内有数の工業団地を有し、自動車、医薬品、半導体関連企業が立地しています。

「まちづくりは人づくり」「人と地域が支えあうまち 金ケ崎」の基本理念のもと、現在、令和3(2021)~7(2025)年度までの教育振興基本計画が進行中です。英語教育に関しては「英語教育の町金ケ崎」の推進に向け、グローバルな視点をもって世界に貢献する人材育成に取り組んでいます。幼児期から英語に慣れ親しみ、英語が使える児童生徒、グローバルな視野と感覚をもち、コミュニケーション能力の豊かな児童生徒の育成を目指して英語教育を推進しています。この英語教育の体制を、現行の学習指導要領施行後も維持・発展させてきたことが、今回の好成績につながったようです。同町の英語教育の特徴は、主に次の3点です。

(1) 幼保から積極的なALT活用で校種間ギャップを減らす

金ケ崎町では現在、町の英語指導員1名とインタラック派遣ALT(町内ではELT: English Language Teacherと称されています)3名を、町立幼稚園3園・保育園3園、小学校5校、中学校1校のすべてに配置しています。特に幼稚園、保育園では計画的・継続的に英語活動を位置づけ、日常的な遊びや生活の中で英語との触れ合いを楽しめるようにしています。指導はALT(T1)と幼稚園教諭や保育士(T2)が事前に打ち合わせをしながら一緒に進めるのが特徴です。英語のあいさつや歌、リズム遊び、英語の絵本の読み聞かせなどをベースにした指導が中心で、各園の実態、年齢に合わせて1回の活動時間の目安も決めています。

小学校では、すべての英語の授業を学級担任(T1)とALT(T2)がチーム・ティーチングで指導しています。学級担任が主導する授業をALTが支援する形です。それぞれの良さや強みを活かして授業に臨むため、授業の前後、また週の中で定

期的に打ち合わせをして準備します。子どもたちは英語を楽しむだけでなく、学年があがるにつれ、英語で思いを伝え合い、コミュニケーションを意識した学びに移行していきます。



金ケ崎小学校3年生 英語の授業風景

小学校における手厚い指導環境は、中学校に入ってから学習意欲を継続させるのに有効です。中学校では聞く・読む・話す・書くの4技能をバランスよく身に付け、英語で主体的にコミュニケーションを図ることが目標になります。小学校で培ってきた英語への親しみ、英語学習の意欲をさらに着実な資質・能力へとつなげています。

金ケ崎町ではALTが幼保・小・中を兼務していることから、幼保でのALTの存在は小学校低・中学年の外国語活動、高学年の外国語への重要な架け橋となります。また、中学校でも小学校の時に習ったALTが授業にいて、生徒は積極的にコミュニケーションを図るようになります。子どもたちは「いつものALTの先生だ」と認識でき、校種の壁を感じることなく英語に慣れ親しむことができています。また、町の英語指導員を中心として、3名のALTは、毎週1回のミーティングを行い、指導方法について研修を行い、指導力の向上を図っています。

今回の調査で、同町では小学校と中学校における学習意欲の「ギャップ」が小さいことは象徴的なデータと言えます。例えば、「英語の勉強は楽しい」「これからも英語を学び続けたい」に対して多くの自治体では小・中の意欲に10%~20%の開きがあるのですが、同町の場合はわずか約3%にとどまっていた。

(2) 校種間をつなぐ交流やイベントの開催

町が主催する「BIG3行事」と呼ぶ英語教育のイベントは、子どもたちに英語を楽しく学び合う機会を提供しています。小学3~6年生を対象とした「グローバル・キャラバン」は、夏休みに実施する英語教室です。中学3年生を対象とした「イングリッシュ道場」は、9月に開催され、ALTとともにオールイングリッシュで丸1日を過ごすイベントです。英検3級程度のインタビューや発表に加え、歌やゲームなどを通じて4技能を高め、これらの活動は、より実践的な英語運用力を向上させるとともに、受験にもつながる活動となっています。

「ティーチャー・イングリッシュ・ワークショップ」は、希望する小学校教員を対象にした授業づくりのワークショップです。英語が苦手な先生も参加し、単元構想や活動をグループ

で考え、授業の情報共有を通じて授業力を向上させています。

また、先生方の授業力向上のための授業研究会や授業参観、学校間の交流授業も計画的に実施されています。特に昨年度から「小6・中1連携プロジェクト」として、学年最後の単元を小中間で交流授業を始めました。小学6年生は中学1年生へ将来の夢や中学校での目標を、中学1年生は小学6年生へ中学校生活を紹介するスピーチ発表を行います。互いに英語でやり取りし、より良い発表を目指すことで、さらなる英語学習への意欲を高めているのです。

(3) 町全体で継続される指導体制

金ケ崎町の充実した英語教育の成果は、何より現場の先生方の中で実感されています。金ケ崎小学校の最上啓校長は、次のように述べています。

「授業が始まる際の英語でのスモールトークにおいて、子どもたちは考えて返答できるようになります。3年生で外国語活動を始めて数カ月でこれができるのは素晴らしいことです。このような積み重ねの結果、6年生になると自分の考えを1分間のスピーチで表現できるようになるのです。ALTが必ず授業に参加してくれることは、小学校の担任にとっては本当に心強いです。」

ここ10年間の取り組みによって、子どもたちの英語力が目に見える形で変わってきました。これはALTの協力なしでは実現できませんでした。



金ケ崎小学校 最上啓 校長

教育の成果は長期的な視点で評価

金ケ崎町教育委員会の石亀典子主任指導主事は、今回のリンク・インタラック「児童生徒英語学習状況調査」の結果を受け、次のように話しています。

「幼稚園・保育園から中学校までの10年間、途切れることなくALTを配置した英語教育を行った最初の卒業生が、昨年度の中学3年生でした。10年間に渡り、子どもたちは実際の英語に触れる機会を得ることで英語学習への意欲を高めました。中学3年を終える頃には、英検3級程度の力を持つ生徒が半数以上に達しました。これは、日本人教員とALTが英語を使いながらコミュニケーションに重点を置いた授業を進めたことの成果です。」

英語が好きで、英語が得意、という気持ちを保ったまま高校に進学すれば、その後の学習や進路、就職の幅も広がるで

しょう。AIなどの新技術が急速に普及し、アフターコロナで国際交流も復活の兆しを見せる中、未来を生きる子どもたちは「学び続ける力」がますます重要になります。幼児期から英語を楽しく学び続ける経験は、子どもたちの「生きる力」にも直結しているのです。



金ケ崎町教育委員会 石亀典子 主任指導主事

金ケ崎町は、英語教育を通して育てたい子ども像を明確に描き、発達段階に合わせた指導や資質・能力の伸ばし方に取り組んできました。ALTと楽しそうに会話する子どもたちの姿は、教育の成果を短期間で判断するのではなく、長期的な視点で見定めることが大事だと教えてくれています。

リンク・インタラックでは2023年度も「英語教育児童生徒状況調査」を実施します。これまでの自治体における英語教育の取り組みを量と質の面から評価し、改善につなげるための指標としてぜひご活用ください。

まとめ

敬愛大学 英語教育開発センター長・国際学部国際学科教授 向後秀明先生のコメント

英語教育における校種間連携の重要性は誰もが認めるところですが、全国的には実質的な取組がなかなか進んでいないようです。そのような現状にあって、小・中連携を超えた金ケ崎町の幼保・小・中連携事業は画期的であり、大きな成果をもたらしています。特に、子どもたちがこれからも英語学習を続け、英語を使って仕事もしてみたいという気持ち強いことは、農業や工業を始め多様な産業が盛んな同町が、今後それらの産業をグローバルな視点で一層充実・発展させていくための人材育成という点からも非常に重要であると思います。

英語が使えるようになるかどうかは、英語に触れる量(exposure)と実際に英語を使う量(experience)にほぼ比例します。金ケ崎町ではALTの活用によって園児の時からこれら2つの機会が豊富に与えられ、英語に慣れ親しむことが可能になっています。また、学習する児童生徒だけでなく、指導する側の先生方も、校種を超えた縦のつながりの中で学び合う体制が取られています。取材を含む今回の調査結果は、早い段階からALTを配置して校種間で連携した教育をすることによって、子どもたちの英語や英語学習に対する意欲、さらには英語力に大きな影響を与え得ることを示しており、他の自治体にとっても大いに参考になるものと考えられます。